



労働政策研究報告書 No.92

サマリー 2007

JILPT : The Japan Institute for Labour Policy and Training

子どもの将来とキャリア教育・
キャリアガイダンスに対する保護者の意識

執筆担当者（執筆順）

氏名	所属	執筆担当章
下村 英雄	労働政策研究・研修機構 副主任研究員	第1章、第4章、 第5章5、第6章、 第7章1
本間 啓二	日本体育大学 教授	第2章
三村 隆男	上越教育大学 准教授	第3章、第7章2
榎本 和生	多摩美術大学 教授	第5章1-4
長須 正明	東京聖栄大学 専任講師	補章

「キャリア発達支援研究会」委員一覧（五十音順）

	榎本 和生	多摩美術大学 教授
	長須 正明	東京聖栄大学 専任講師
	本間 啓二	日本体育大学 教授
座長	三村 隆男	上越教育大学 准教授
	吉田 修	労働大学校 特任教授
〈事務局〉	下村 英雄	キャリアガイダンス部門 副主任研究員

※なお、本研究会のメンバーは日本キャリア教育学会研究推進委員会のメンバーであり、本研究は、日本キャリア教育学会との共同研究として行われた。

〈概要〉

現在、キャリア教育・キャリアガイダンスでは、「保護者」が様々な立場から重要な役割を果たしている。本研究では、その「保護者」が、今後の子どもの将来やキャリア教育・キャリアガイダンスをどのように見ているのかに焦点を当てて調査研究を行った。研究期間は平成18年4月～平成19年3月であり、キャリア教育・キャリアガイダンスに対する保護者のニーズに関する調査を実施し、その背景を分析した。

1. 本研究の目的

フリーター・ニートに象徴される若年不安定就労の問題に対する社会的な関心の高まりから、現在、各方面で若者の就労支援・キャリア形成支援が行われている。なかでも、学校教育段階の若者に対するキャリア教育・キャリアガイダンスの取り組みは大きな広がりを見せている。

こうしたなか、改めて、その重要性が認識されているのが、キャリア教育・キャリアガイダンスにおける保護者の役割である。現在、保護者は、様々な立場で学校のキャリア教育・キャリアガイダンスに関わっている。家庭にあっては親であり、子どもに対する家庭教育の主体である。しかし、同時に、社会人としては職場体験先として子どもを迎える受け入れ先でもある。また、地域では他人の子どもを含めた若者を取り巻く地域住民でもある。

そのため、保護者が現状のキャリア教育・キャリアガイダンスをどのように考えているのかは、今後の日本のキャリア教育・キャリアガイダンス施策の行く末を占う上で極めて重要な要素となる。現状において、保護者が子どもの将来に寄せている期待とは何か。そして、子どもが育った先にある社会をどのように考えているのか。子どもにどんな能力を身につけさせたいと考え、学校にどのような教育を期待しているのか。そのために、社会人として、地域住民としてどんな面で貢献できると考えているのか。

本報告書では、以上のような問題意識を背景に、子どもの将来とキャリアガイダンスに対する保護者の意識について幅広く検討を行うことを目的とした。

2. 本研究の方法

本研究では、キャリア教育・キャリアガイダンスに対する一般の社会ニーズに関する調査を実施し、その背景を分析した。調査は、調査会社のモニターから子どもがいる成人を対象に性別および年齢を一定にしたサンプリング方法を用いて郵送で実施した。具体的には、性別（男性・女性）×年齢（30代・40代・50代）で作られる6つのセルに200名ずつを均等に割り当てて調査を行えるように調査会社に依頼した。以上のサンプリングに基づいて、最終的に、調査発送数1,500通、うち回収数1,372通で回収率は91.5%であった。調査は、2007年1～2月にかけて実施した。

調査項目は、大きく、「本人について」「これからの若者・子どもについて」「学校におけるキャリア教育について」「社会人の立場からみた若者について」「地域住民の立場からみた若者について」「今後の社会情勢について」の6つのセクションに分かれていた。

3. 本研究の結果

子どもの将来に対する期待 子どもの将来については、子どもが望む職業に就いてほしいという回答が最も多く、その他、手に職を就けたり、資格を取ることなど安定した職業に就いてほしいと望む回答が多かった。そのために家庭で行っていることとして、基本的な生活習

慣を身につける、時間やルールを守る、自分のことは自分でさせるなどがあり、現段階でこうした役割を担うのは、幼少期に子どもと接する時間が長い母親が中心となっていた。なお、子どもが大きくなるにつれて学業成績や子どもの自主性を重視していた（図1）。

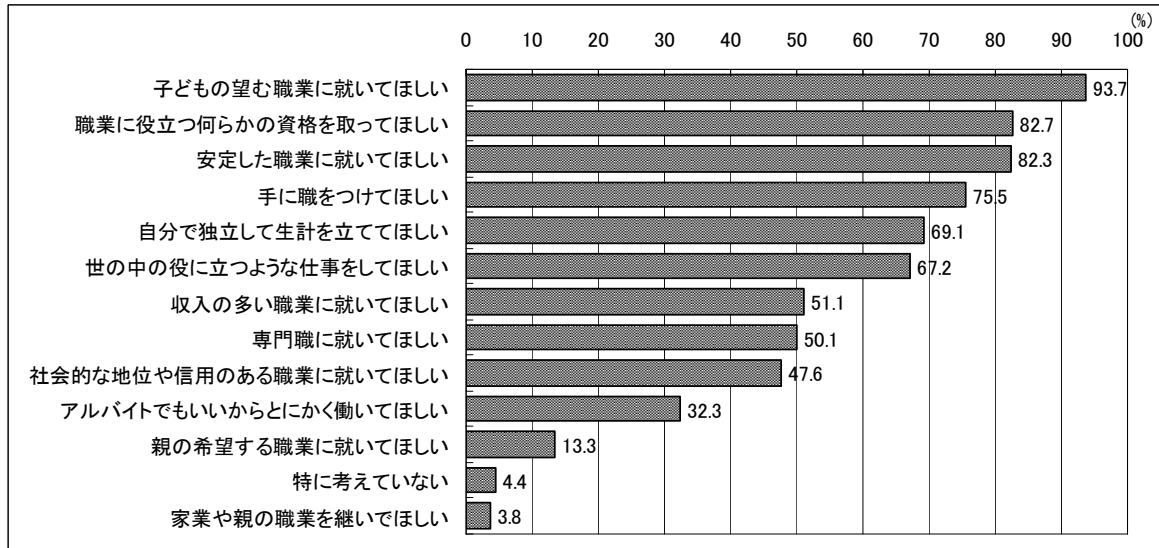


図1 子どもの将来に対する期待(かなり当てはまる+当てはまる)

学校のキャリア教育に対する期待 学校のキャリア教育に対しては、学ぶこと働くことの意義、自分の個性や適性の理解、社会人に必要なモラルやマナーなどの向上に対する期待が多い。また、具体的なキャリア教育の内容については、職場見学・職場体験学習に対する賛成意見が多く、積極的に協力したいという声も多かった。ただし、男性を中心に職場体験を受け入れてもどのように対応して良いか分からないという意見もあった。学校で身につけて欲しい能力として、コミュニケーション能力を身につけてほしいという意見が最も多かったが、以下、人を思いやる力、読み書きなどの基礎学力、責任感、協調性、忍耐力などの人格形成的能力に対する要望も根強かった（図2）。

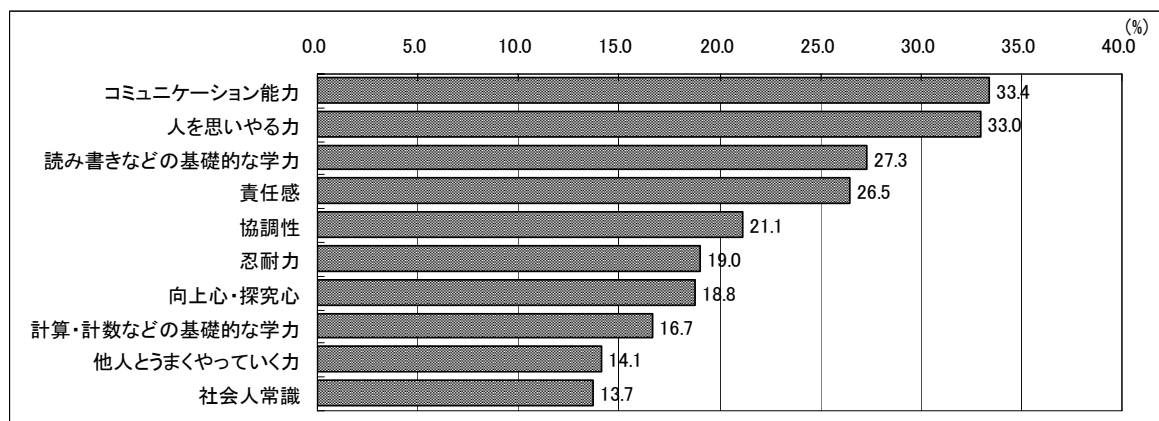


図2 子どもに学校で身につけてほしいと思う力(上位10位まで)
(かなり当てはまる+当てはまる)

なお、子どもの将来に対する期待は、おおむね子どもの社会的地位の達成を望むか否か、子どもの職業的技術の獲得を望むか否かの2つの側面から検討することができ、両者は、学校に対してどのようなタイプのキャリア教育・進路指導を望むかと密接に関連していた。ただし、子どもの進路選択が重要な問題となる年頃の親では、地位達成・技術獲得の両面が意識され、多大な期待が寄せられていた。

また、図3の結果に基づいて、今後のキャリア教育・キャリアガイダンス施策および労働行政に対する示唆を行い、①キャリア教育・キャリアガイダンスに対する多様なニーズをふまえた労働行政側からの積極的な対応の必要性、②生涯キャリアガイダンスの基盤としての基礎学力習得の重要性およびそのための支援の必要性、③学校段階の若者およびその保護者層の個別支援ニーズに向けたキャリアガイダンスリソースの活用の3点を指摘した(図3)。

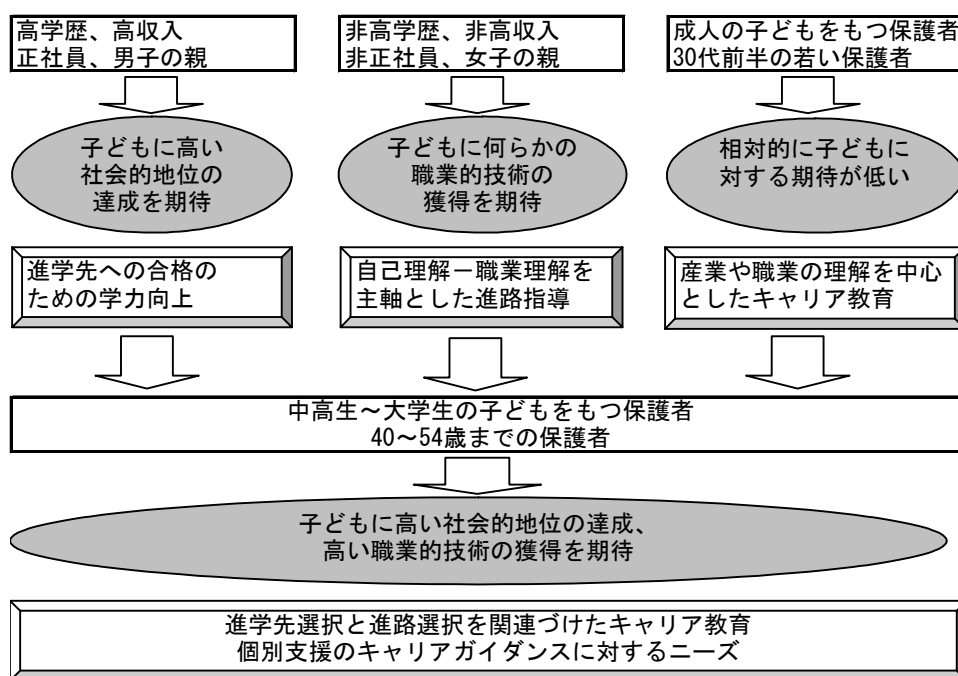


図3 子どもの将来に対する期待とキャリア教育・キャリアガイダンスの関係
(結果の概要模式図)

社会人の立場からみたキャリア教育 社会に出てくる若者に不足している能力として、マナーや時間、あいさつや受け答えなどの一般常識、また他者への配慮や思いやり、コミュニケーションや道徳心・公共心などが多く挙げられた。ただし、年齢が高いほど基礎学力重視、高学歴の親ほど抽象的な能力重視、女性または学歴・年収の低い親ほど一般常識重視という傾向がみられた。こうした若者の能力を誰が育成すべきかについては、基礎学力は学校、基本的な生活習慣および人格形成は家庭、基本的な職業能力は職場、コミュニケーション能力は学校が中心であるが、地域・家庭の役割も大きいと認識されていた(図4)。

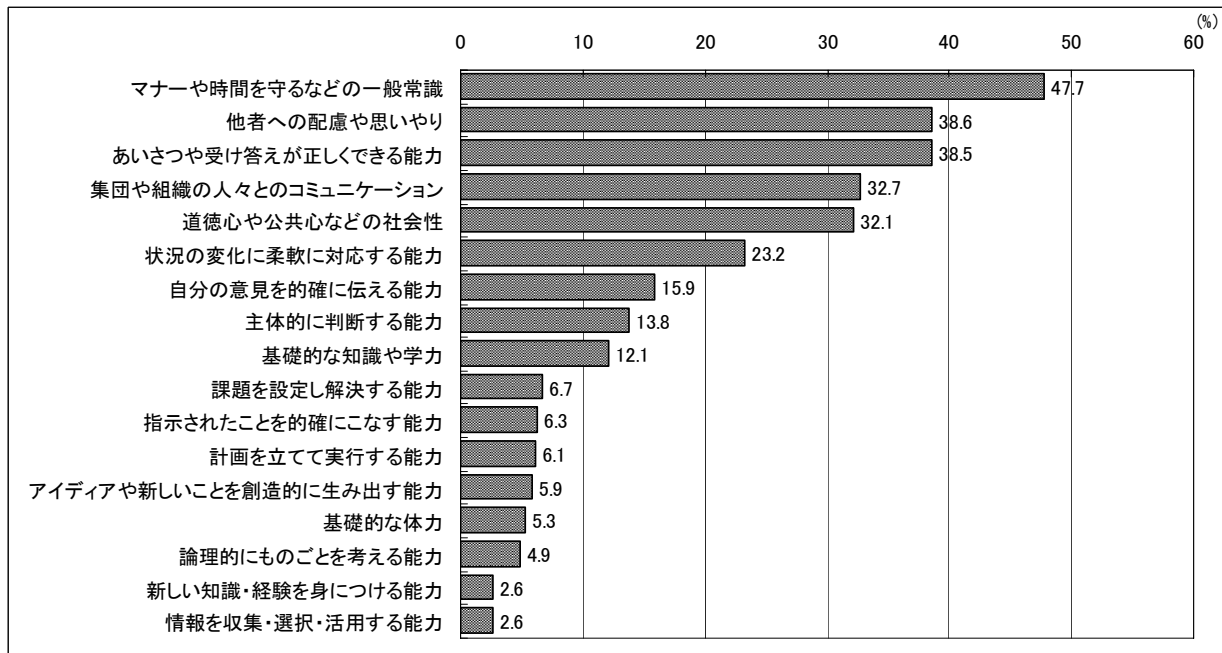


図4 保護者による「社会人の立場から」、社会に出てくる若者に期待する能力
(選択率)

地域住民の立場からみたキャリア教育 地域住民としてキャリア教育に関わりたいと思い、少しは関わるとしながらも、具体的には女性を中心に、親どうしが話し合い、若者に様々な人々と接する機会を与えるなどの活動が中心となっている。ただし、地域住民が関わる仕組みづくり、受け皿となる施設があれば、よりいっそう協力が可能であるという認識が示された。また、そもそも保護者が気楽に相談でき、互いに協力できるネットワーク作りが重要であるという結果も得られた。男性は職場を体験させることで協力できるとしながらも仕事が忙しく関われないという意見が多かったが、一般に、年齢が高いほど、学歴が高いほど、地域住民として関わる仕組みを求めている。

今後の社会情勢について 少子高齢化、格差拡大、グローバル化・国際化という認識が広く共有されている。また、今後もフリーターやニートが増えて若者の就職が引き続き問題になるという心配も根強い。概して、男性、高学歴、高収入の親ほど格差拡大・グローバル化が進むという認識をもっており、女性、非高学歴の親ほど若者が定職に就くのが難しくなると考えていた。また、年齢が高いほど基礎学力の低下を心配していた。今後の社会情勢に対する認識と社会人として期待する能力の関連には、大まかな対応関係があり、若者の就職に対する不安が高い保護者は、個々の職場における具体的な人間関係スキルを身につけた若者を社会人として期待しており、一方で、格差拡大に対する不安が高い保護者は、特定の職場に限定されないより抽象的な概念的なスキルを社会人として期待していた（図5）。

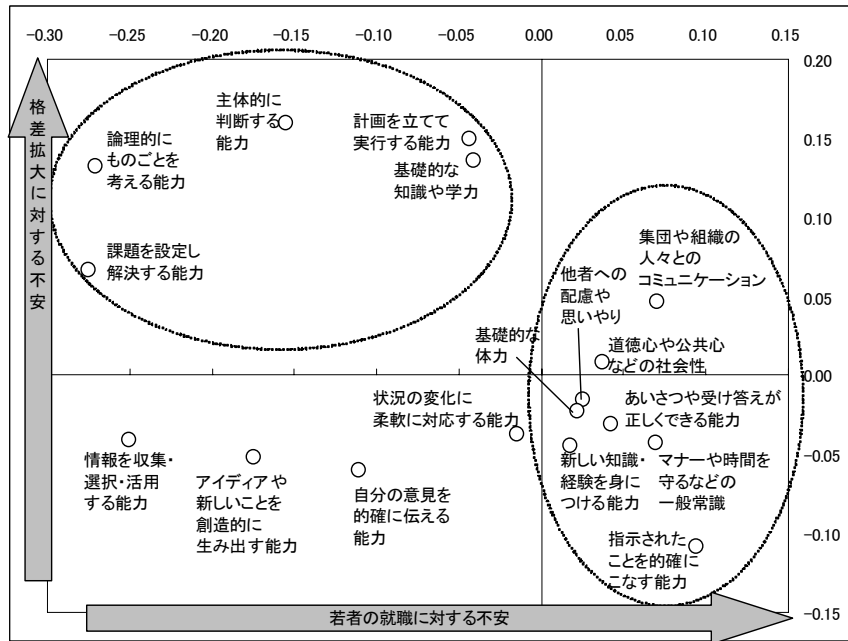


図5 今後の社会情勢に対する認識と社会人として期待する能力の関連

自由記述結果 子どもの将来やキャリア教育に関する自由記述結果からは、一部、キャリア教育の内容や目的を理解し、その意義を認める回答が寄せられたものの、概して、キャリア教育については未だ世間一般の理解は十分ではなく、その目的や効果に懐疑的である回答も多かった。背景には、早い段階で職業やキャリアに関する意識づけをするよりは、むしろ人格形成や社会常識、基礎学力といったことに注力する方が、結果的に将来の子どもの職業やキャリアにとっては重要であるという認識がある。また、広く勤労や労働を尊ぶ雰囲気醸成といった極めて抽象的な要望も寄せられており、今後の検討課題としたい。

○キャリア教育に対するポジティブな意見

- ・子供には自分のやりたい（子供の望む）職業についてほしい。キャリア教育は大いに賛成。特に職場体験学習。
- ・就職活動の頃にならないと自分のやりたい仕事が見えてこない時代に育ったので、キャリア教育は良い事だと思う。（後略）
- ・就職する際選択肢を増やしてあげたい。キャリア教育により適切な進路選択もしくは、進路変更も可能になるのではないかな。
- ・キャリア教育はとても良いと思います。一箇所だけでなく、いろいろな、職種を経験できると良いと思います。是非、続けて欲しいです。
- ・自分の子供時代の反省も踏まえて、やはり早い時期から、世の中に現在ある職業についての知識をもってもらいたいと考えます。その為にも、地域を巻きこんだキャリア教育の考えには賛成です。

○キャリア教育よりも人格形成に重点を置くべきとする意見

- ・キャリア教育は将来の選択肢を決定する上で有効だと思う。ただ、協調性や学ぶ姿勢等、家庭での教育方針、考え方を基本とした上で受け入れられるべき。
- ・まずは、家族や学校での基本マナーや道徳があつてから子供の将来やキャリア教育があると思います。
- ・「キャリア教育」にはあまり興味ありません。人間性を重視してますので生活や生きていく上で大切な事を教えていきたいです。
- ・子どもたちにキャリア教育を行う前に他者への配慮や思いやり 道徳心 公共心などをもたせる教育を行うべきと考える。(後略)
- ・キャリア教育より、我慢する事や努力する事や夢を持つと言うような心の教育が必票では。

政策的示唆 子どもの将来やキャリアに対する教育的な介入施策として、キャリア教育およびキャリアガイダンスに対しては一定のニーズが示された。特に、職場体験学習については広く有意義であるとの認識が示され、日本のキャリア教育の特徴である職場体験学習を中心としたキャリア教育の展開に対しては、労働行政の立場から今後とも継続的に側面的な支援を行っていく必要性が改めて示されたと考える。

一方で、従来、あまり重視されてこなかったキャリアガイダンス政策に対するニーズとして、子どものソフトスキル、人格形成、一般常識を伸ばして欲しいとする意見も寄せられ、その対応には、今後、若干の検討が余地が残される。また、今回の調査に回答した保護者の中でも、特に、受験期の子どもや就職活動を控えた子どもを持つ親では、進学先選択や基礎学力の向上に対するニーズも強く、今後、キャリア教育の中にどのように組み込んでいくかが課題となる。ただし、保護者自身が受けた学力偏重の進路指導の影響という世代効果の可能性も重要な論点であり、今後、考慮すべき課題を提供する。

さらに、地域住民としてキャリア教育に関わりたいというニーズは、一般に考えられている以上に多く、有効な仕組みを作り、ネットワークを作ることを通じて、広く地域のキャリアガイダンスを機能させていくということも、今後のキャリアガイダンス政策の1つの方向として考えられる。

4. 本報告書の概要

第1章では、本研究の背景を整理し、キャリア教育・キャリアガイダンスを考える上で保護者を検討する重要性について述べた。本研究の問題意識を述べて、本研究で実施した調査の手法および調査回答者の特徴についてとりまとめた。

第2章では、「子どもの将来に対する保護者の期待」を取り上げ、単純集計および性別・年齢別の集計結果を掲載した。子どもの将来に望むこと、家庭における子どもとの接し方などの回答結果から、保護者のキャリア教育・キャリアガイダンスに対する潜在的なニーズが示

された。

第3章では、「学校のキャリア教育に対する期待」に関して、学校で行われている進路指導に対する期待、キャリア教育として重要と思われる授業内容、学校で身につけてほしいと保護者が期待している事などがらなどについて、単純集計および性別・年齢別の集計結果を掲載した。保護者の学校に対する期待がキャリア教育の観点から浮き彫りにした。

第4章では、「子どもの将来とキャリア教育に対する保護者の意識」について、おもに多変量解析を用いた分析を中心に検討を行った。子どもの将来に対する期待とキャリア教育に対する関心の両者の関係を明らかにし、あわせてキャリア教育・キャリアガイダンス施策における今後の可能性について、言及した。

第5章では、「社会人・地域住民の立場からみたキャリア教育」について、保護者に社会人としての立場から回答を求めた結果、および地域住民の立場から回答を求めた結果を分析した。社会人としてどんな能力・資質をもつ若者を求めているか、地域住民としてどの程度キャリア教育に関わることができるかなどを中心に、いくつかの論点について分析を行った。

第6章では、「今後の社会情勢とキャリア教育」として、保護者が今後の社会情勢をどのように考えているのか、また、それがキャリア教育に対する認識とどのように関わっているのかを分析した。

第7章では、本研究の調査結果をふまえて、今後のキャリア教育・キャリアガイダンス施策に関する示唆を行った。労働行政におけるキャリアガイダンス施策および学校におけるキャリア教育の2つの側面から、今後の可能性について調査結果から派生する議論も含めて検討を行った。

補章では、「自由記述結果にみるキャリア教育」として、本調査における自由記述欄の結果を詳しく掲載した。「キャリア教育」や「子どもの将来」に関する記述内容を中心に整理を行い、今後のキャリア教育・キャリアガイダンスについて示唆を行った。

【付録】

本報告書の構成(目次)

- 第1章 本研究の問題意識と目的
- 第2章 子どもの将来に対する保護者の期待
- 第3章 学校のキャリア教育に対する期待
- 第4章 子どもの将来とキャリア教育に対する保護者の意識
 - －多変量解析による検討および労働行政に対する示唆
- 第5章 社会人・地域住民の立場からみたキャリア教育
- 第6章 今後の社会情勢の認識とキャリア教育
- 第7章 今後のキャリア教育・キャリアガイダンス施策への示唆
- 補章 自由記述結果にみるキャリア教育

労働政策研究報告書 No.92 サマリー

子どもの将来とキャリア教育・キャリアガイダンスに対する保護者の意識

発行年月日 2007年9月30日

編集・発行 独立行政法人 労働政策研究・研修機構

〒177-8502 東京都練馬区上石神井4-8-23

(編集) 研究調整部研究調整課 TEL:03-5991-5104

(販売) 研究調整部成果普及課 TEL:03-5903-6263

FAX:03-5903-6115

印刷・製本 有限会社 太平印刷

©2007 JILPT

*労働政策研究報告書全文はホームページで提供しております。

(URL:<http://www.jil.go.jp/>)